（令和 3 年 12 月 21 日）

第 8 回 赤松小三郎講演会　のご報告

今回で第 8 回を迎える赤松小三郎講演会は、日比谷図書文化館（千代田区）で新型コロナウイルス感染防止対策をしっかり行う中で 91 名が参加のもと、講師に歴史家の安藤優一郎氏をお迎えして開催された。

日時　　：令和 3 年 12 月 12 日（土）14:00～16:30
場所　　：日比谷図書文化館　地下 1 階コンベンションホール
参加者　：91 名（同窓生 39 名、一般 52 名）

◎演題：『赤松小三郎と勝海舟』
◎講師：安藤優一郎氏

＜配布資料＞
1．　安藤優一郎講師講演資料(※)
2．　「赤松小三郎研究会」入会のご案内
3．　「赤松小三郎研究会」最近の活動概要(※)
4．　「第 8 回赤松小三郎講演会」アンケート
5．　講演会案内チラシ(※)
6．　『江戸の旅行の裏事情』案内チラシ

(※)印の資料は本報告に添付していますのでご参照ください。

＜内容＞
〇赤松小三郎研究会 会長 滝澤進より挨拶
〇同研究会　事務局長 小山平六より講師 安藤優一郎氏の紹介
〇同研究会　事務局　荻原貴が司会

〇講演要旨
はじめに
今日は、赤松小三郎と勝海舟の生き様を通して幕末の歴史を紐解いていく。また、レジメ 2 ページにある「赤松小三郎・勝海舟関係年表」でなるべく時系列で説明をしていく。

1．　譜代大名と上田藩松平家
上田藩は、真田家→仙石家→松平家と藩主が変わり、松平家は松平惣領家の分家の十八松平家の一つで藤井松平家。徳川家とは主従関係にある譜代大名。譜代大名は一般的に石高は少ないが幕政に参加できるなど優遇されていた。小三郎の主君の松平忠固（忠優）は老中を務めた。

２．　小三郎と海舟の出会い

・小三郎は上田藩の下級武士（家禄は 10 石ほど）の次男、海舟も江戸の下級武士（家禄は 41 石ほど）の家に生まれ（海舟が小三郎の 8 歳年上)、二人とも立身の為に勉学に励んだ。

・嘉永元年(1848)、小三郎は上田藩の藩校で優秀な成績であったため、江戸へ遊学（出府）、数学者内田弥太郎に入門。更に兵学者の幕臣下曽根金三郎に入門。このことが後の小三郎の人生に大きな意味を持つ。この頃は大国の清が英国に敗れるなど日本が欧米列強からの侵略に危機感を抱いており、兵学の需要が高まっていた。

・嘉永 3 年(1850)、海舟は江戸で蘭学・兵学塾を開いた。 この時まだ幕府の役職に就いていなかったが自主的に開塾した。嘉永 6 年ペリー来航後に幕府が海防について広く意見を求めた際に、海舟が上奏した内容が目に留まったことがきっかけで幕府に認められていく。

・安政元年(1854)、小三郎は海舟に入門する。そして翌年、幹部伝習生であった海舟の従者として長崎海軍伝習所に入所。オランダ人や幕臣、他藩（多くは西国）の藩士と交流、オランダ人からオランダ語や軍事知識を学び、翻訳作業も行う。途中で小三郎と海舟は理由は不明だが仲が疎遠になる。

・長崎海軍伝習所が閉所し、安政 6 年(1859)、海舟は江戸築地の軍艦操練所教授方頭取に就任。翌年の万延元年(1860)、咸臨丸を指揮して渡米する。これに中津藩士福沢諭吉が乗船しており、彼はこれを含めて生涯 3 回欧米に渡航し、有名な『西洋事情』も刊行。小三郎がもし海外へ行けたなら人生は変わっていたかも知れない。

・咸臨丸に乗船できなかった小三郎は、しばらく上田で雌伏の日々を過ごす。上田藩では長崎海軍伝習所での経験を認められて調練調方御用掛や砲術道具製作御用掛（軍事部門）に就任する。

３．　小三郎と海舟の再会

・海舟は帰国後、文久 2 年(1862)、軍艦奉行並に就任し、実質幕府の海軍を仕切る。背景には政事総裁職松平春嶽による幕政改革がある。この頃、土佐藩浪士坂本龍馬が海舟の門人になる。

・文久 2 年(1862) 12 月頃（？）、江戸にいた小三郎の兄、芦田柔太郎が海舟の母を尋ねていることから、この頃には小三郎と海舟の関係は修復していたのではないか。小三郎は、長崎海軍伝習所でお世話になり、軍艦奉行並にまで出世した海舟との関係は重んじていたのだろう。

・文久 3 年(1863) 5 月、長州藩が外国船を砲撃。7 月、薩英戦争。8 月、京都で政変。
この年、小三郎は藩政改革の意見書を提出（したと思われる～草稿が残っている)。単なる技術者を超えて憂国の士（攘夷ではなく、日本を強くするために自分は何をすべきか・・・）になりつつある。

・元治元年(1864) 5 月、海舟は軍艦奉行に昇進。神戸に私塾を開き、海舟の建言により幕府は神戸海軍操練所を設置した。ところが、池田屋事件や 7 月に起こった禁門の変に関わった長州藩士が海舟の私塾にいたことなどから、11 月に海舟は失脚して江戸に戻る。この直後に小三郎は海舟の元を訪ねている。（海舟の日記に記録有り）
・小三郎は、禁門の変の後の第一次長州征伐において、上田藩と共に江戸に出府し武器購入の公務を行うかたわら、横浜で英国陸軍士官アプリンから英語や英国兵法を学ぶ。→慶応 2 年(1866) 3 月、『英国歩兵練法』（下曽根稽古場蔵版、浅津富之助と共著）の翻訳刊行。慶応 3 年(1867) 5 月、薩摩の依頼により『薩摩藩重訂 英国歩兵練法』の翻訳刊行。

４． 小三郎と海舟と薩摩藩

・慶応 2 年(1866) 2 月、小三郎は、長州再征反対の建白書を幕府に提出して幕府内に知られる存在になる。一方、軍艦奉行に再任された海舟は人脈が広いことを生かして薩摩・会津の調停や長州との和平交渉に奔走する。
・同年 10 月、小三郎は京都で私塾を開き、他藩に人脈が広がる。薩摩藩や会津藩の要請で英国式兵制改革を指導。幕府からも注目されて同年 12 月、幕府開成所教官にスカウトされるが、上田藩はこれを拒否する。優秀な人材を幕府に取られたくないという理由で、これは一般的には他藩でも同様な考えだった。上田藩は小三郎に上田へ召還命令を出すが小三郎はなかなか応じなかった。
・慶応 3 年(1867) 5 月、小三郎は幕府、薩摩、福井藩に建白書（「建白七策」）を提出し、議会制度の採用など日本に合った新しい政体構想と国家のグランドデザインを提案。
・同年 5 月の四侯会議、慶喜（長州藩への寛大論を拒否）Vs 薩摩藩、薩摩藩と長州藩との連携強化、土佐藩とも連携、討幕論をめぐる薩摩藩内部の不協和音、等複雑な政治情勢となる。

５． 小三郎の死

・小三郎が、幕府、薩摩藩、会津藩の三者間を調停する中、薩摩藩には小三郎がスパイであると疑う動きがあり、いよいよ小三郎が上田へ帰国するとなった段階で薩摩藩は軍事機密が漏れることを恐れて小三郎を暗殺した（慶応 3 年(1867)　9 月 3 日）、と理解して良いだろう。
・小三郎横死の背景にあった権力闘争とは、新政府誕生を見据えた主導権争い、慶喜排除を目指す薩摩藩、慶喜を迎え入れたい福井・土佐藩、薩摩（長州）藩を排除したい会津・桑名藩、親藩・譜代大名、その他の外様大名、などである。

最後に

・幕末史はまだまだ知られていないことが多い。幕府、薩摩、長州、会津だけではなくて他の藩や人も日本の政治を変えていこうとしていた。その一例が赤松小三郎である。彼の生き様を通じて今までと異なる新しい幕末史を描ける。その意味で、幕末に小三郎の

ような人物がいたということを皆様に知ってもらえたらうれしい。
・小三郎の人生だけを見ていると分からないことが、他の明治を生き残った人の人生との比較でわかってくることがある。

＜質疑応答＞　（ここでは一部を紹介します。）

質問１：小三郎が咸臨丸に乗船できなくて忸怩（じくじ）たる思いから、乗船した赤松大三郎という人物にもじって名前を清次郎から小三郎に変えたというのは本当ですか？

回答：　そのような記載のある文献もありますが、私はそうではないと思います。

質問２：桐野利秋ら薩摩藩士が小三郎を暗殺したにもかかわらず、金戒光明寺で薩摩藩が大規模な葬儀を行い多額の香典も贈っているのは、世間の目を欺くためだったのでしょうか？

回答：　暗殺直後から世間では薩摩藩が暗殺したという噂が流れており、薩摩藩としては何かしないと立場が悪くなるのでそのようなことを行ったということだと思います。

質問３：上田藩と小三郎の関係についてどうもしっくりこないのですが・・・

回答：　小三郎の考え方は藩を超えて日本の国をどうするかという視点でした。一方、上田藩に限らず当時の藩の上層部は自分の立場を守りたかったので、小三郎が他藩にいたとしても同じだったかもしれません。

質問４：勝海舟は小三郎に関する史料を残していますか？

回答：　海舟は日記には小三郎のことを書いていますが、他の史料は見当たりません。ちなみに、海舟は小三郎の兄、芦田柔太郎についても注目していたのでその辺りから手掛かりがあると面白いと思います。

質問５：福沢諭吉と小三郎の関係は？

回答：　お互いは知っていたと思いますが、実際に会ってはいないのではないのでしょうか。史料が残っていないので残念です。

質問６：現在憲法改正の議論が起きていますが、150 年以上前の小三郎の唱えた現代にも通じる素晴らしい憲法構想を広く世に伝えるにはどうしたらよいでしょうか？

回答：　先ずは、小三郎のような人物がいたということを広く世間に知ってもらうことが大切です。そして歴史学だけではなく政治学など他の分野の方々にも知ってもらうことです。案外、外国人が小三郎の生き様や思想を知ったら大きな反響があるのではないでしょうか。今後は海外に向けて小三郎の業績を発信することも必要

で、それは長い目でみれば回り回って日本国内の政治を動かす原動力になると思います。

※質疑応答の終了後に、講演会に参加されていた勝海舟の玄孫（やしゃご）の髙山（こうやま）みな子様から講演の感想を述べていただきました。

以上

（報告者）
赤松小三郎研究会事務局
荻原　貴（79 期）

赤松小三郎講演会

赤松小三郎と勝海舟

２０２１年１２月１２日　安藤優一郎

１．譜代大名上田藩松平家

松平惣領家と分家の十八松平／家康の徳川改姓により分家とは主従関係～譜代大名へ／藤井松平家の上田入封／藩主松平忠固（忠優）の老中就任

２．小三郎と海舟の出会い

（１）江戸への遊学

江戸出府／海舟、蘭学・兵学塾開塾／ペリー来航後の上書で注目された海舟に入門

（２）長崎での日々

オランダ海軍の援助による長崎海軍伝習所の設置～海舟は幹部伝習生として長崎へ／海舟の従者として入所～オランダ人や幕臣、他藩の藩士と交流／オランダ人から軍事知識を学び、翻訳作業に従事～語学能力の向上／小笠原鐘次郎の従者に～海舟とは疎遠に？

（３）上田に戻る

長崎海軍伝習所の閉所と江戸帰府／海舟は軍艦操練所教授方頭取に。咸臨丸を指揮して渡米～小三郎は乗船できず／別ルートで乗船できた中津藩士福沢諭吉／雌伏の日々

３．小三郎と海舟の再会

（１）幕府海軍を仕切る海舟との関係

海舟、軍艦奉行並就任／政事総裁職松平春嶽による幕政改革／土佐藩浪士坂本龍馬、海舟の門人に／神戸海軍操練所の設立と海舟私塾～江戸と上方を行き来する海舟／上田藩の兵制改革に従事／海舟母と対面（文久２年 12 月？）～海舟との関係は修復？

（２）海舟の失脚と薩摩藩

禁門の変～第一次長州征伐／海舟と西郷の出会い～征長軍解兵へ／海舟の免職／龍馬は薩摩藩に保護される／英語を学ぶ～『英国歩兵練法』翻訳刊行

４．小三郎と海舟と薩摩藩

（１）京都での活動を展開する

長州再征反対の建白書を幕府に提出～幕府内に知られる／海舟、薩摩・会津藩の調停、長州藩との和平交渉に奔走／京都で塾を開く～他藩に人脈が広がる。薩摩藩の要請で英式兵制改革を指導／江戸に戻る海舟と最後の対面／幕府からのスカウトを拒否した上田藩

（２）幕府と薩摩藩の暗闘

慶喜ＶＳ薩摩藩など四侯会議～長州藩への寛大論を拒否した慶喜／薩摩藩、長州藩との提携強化を確認／土佐藩とも連携／討幕論をめぐる薩摩藩内部の不協和音

５．小三郎の死

（１）新国家の構想をめぐる合従連衡

将軍絶対君主論ＶＳ雄藩連合論／公議輿論の重視を掲げることで国政参画を目指す薩摩・福井・土佐藩などの雄藩／幕府、薩摩藩、福井藩に議会制度の採用を提案

（２）開戦前夜の京都と小三郎に向けられる疑念

討幕を目指す西郷・大久保⇔薩摩藩の兵制改革を担った小三郎／幕府と薩摩藩と会津藩三者の間を調停／会津藩からの期待～藩士山本覚馬／小三郎の理解者？慶喜の側近永井尚志／慶喜に拝謁～佐久間象山と同じ立ち位置？／上田藩からの帰国の厳命の背景

（３）小三郎横死の背景にあった権力闘争

新政府誕生を見据えた主導権争い／慶喜排除を目指す薩摩藩／慶喜を迎え入れたい福井・土佐藩／薩摩（長州）藩を排除したい会津・桑名藩、親藩・譜代藩／その他の外様藩

講師紹介

歴史家。文学博士（早稲田大学）。江戸・幕末をテーマとする執筆・講演活動を展開。主要著作に『江戸の旅行の裏事情』朝日新書、『越前福井藩主松平春嶽』平凡社新書、『徳川幕府の資金繰り』彩図社、『お殿様の定年後』日経プレミアシリーズなど。

赤松小三郎・勝海舟関係年表

年月日	年齢	事項
文政６年（1823）		1/30、幕臣勝小吉の長男として、本所亀沢町に生まれる。
天保２年（1831）	１才	4/4、上田藩士芦田勘兵衛次男として上田城下に生まれる
嘉永元年（1848）	18 才	江戸に出府。数学者内田弥太郎に入門
嘉永３年（1850）	20 才	海舟、蘭学・兵学塾開く
嘉永５年（1852）	22 才	兵学者の幕臣下曽根金三郎に入門
嘉永６年（1853）	23 才	6/3、ペリー、浦賀来航。７月、海舟、海防に関する上書提出
安政元年（1854）	24 才	3/3、日米和親条約。春、赤松家に養子入り。海舟に入門
安政２年（1855）	25 才	10/20、海舟、長崎着。海舟の従者として長崎海軍伝習所に入所
安政４年（1857）	27 才	７月、オランダの兵書を翻訳
安政６年（1859）	29 才	1/28、海舟、軍艦操練所教授方頭取就任。
万延元年（1860）	30 才	1/13、咸臨丸、出帆。３月、赤松家相続。
文久２年（1862）	32 才	７月、上田藩調練調方御用掛に就任。閏 8/17、海舟、軍艦奉行並就任。
文久３年（1863）	33 才	１月、砲術道具製作御掛となる。5/10、長州藩、外国船を砲撃。7/2、薩英戦争。8/18、京都で政変。この年、藩政改革の意見書を提出？
元治元年（1864）	34 才	5/14、海舟、軍艦奉行に昇進。5/29、神戸海軍操練所設置の布達。7/18、禁門の変。7/23、長州藩追討の勅命。9/11、海舟、西郷隆盛と大坂で面会。９月、武器購入の公務で江戸に出府。11/10、海舟、軍艦奉行免職。11 月、横浜で英語を学び始める。12/18、海舟と対面
慶応２年（1866）	36 才	1/22、薩長盟約。３月、『英国歩兵練法』の完訳。5/28、軍艦奉行再任の海舟、大坂出張。6/7、征長軍、長州藩と開戦。８月、長州再征を批判する建白書提出。9/2、海舟、長州藩と停戦協議。9 月、藩主に建白書提出。10/3、京都で海舟と対面。10 月、京都の薩摩藩邸で兵学の講義と調練指導にあたる。12 月、幕府開成所から教官にスカウトされるが、藩が固辞。
慶応３年（1867）	37 才	3 月、会津洋学校顧問就任。5 月、幕府、薩摩、福井藩に建白書提出。『重訂英国歩兵練法』刊行。6/22、薩土盟約（9 月初、解消）。9/3、暗殺。10/14、大政奉還。11/15、龍馬暗殺。12/9、新政府誕生

※関良基『赤松小三郎ともう一つの明治維新』作品社など参照。

第 8 回赤松小三郎研究会講演会速報

挨拶する滝澤 進当研究会会長（61 期）

講師の安藤優一郎氏

質問に立つ白井 透さん（60 期）

「赤松小三郎研究会」最近の活動概要

（２０１９年４月１３日～２０２０年２月、２０２１年１０月）

＊　各回の詳しい内容は、上田高校関東同窓会ホームページの会の活動・同好会活動の赤松小三郎研究会をご参照ください。http://uedakant.sakura.ne.jp/

第３７回赤松小三郎研究会

日時：２０２１年１０月９日（土）午後２時～３時半

○　八木剛介の筆録「田原記聞」を読んで

—赤松小三郎の号令詞についてー（その２）

- 報告者：石川浩氏
- 概要：２０２０年２月８日の関良基氏の報告を受けて、岩崎鐵志氏の「八木剛介筆録『田原記聞』」を分析調査した結果として、次の諸点が報告された。
  - オランダ語を訳した「田原記聞」にある号令詞と英語を訳した小三郎の「英国歩兵練法」で類似したものは確認できない。
  - 一方、「田原記聞」と同時期にオランダ語を日本語訳した徳広幸蔵の資料には、小三郎が訳した号令詞と類似のものがある。
  - いずれにせよ、小三郎や八木剛介・徳広幸蔵が訳した日本語の号令詞は、近代学校教育での「兵制体操」に導入され、現在に至ったといっても過言ではない。

○　上田市立博物館における赤松小三郎遺品の展示状況

- 報告者：荻原貴氏
- 概要：２０２１年１０月２日、上田市立博物館赤松小三郎常設展示において、当研究会有志の協力により上田市が購入した小三郎の次の３つの遺品が展示されていることを確認した旨が報告された（いずれも「赤松小三郎　所用」との説明あり。）。
  - ①　ミニエー銃
  - ②　幕府海軍弾薬箱
  - ③　八分儀

（注）　小三郎の遺品については、上記３点に加え、測量器具等についても、当研究会有志の協力により、上田市が購入している。

第３６回赤松小三郎研究会

日時：２０２０年２月８日（土）午後２時～４時

（１）　伊能忠敬作成の伊能図の紹介

・　報告者：沓掛忠氏

・　概要：伊能忠敬が１８００年～１８１６年に日本初の実測により作成した「伊能図」について、「大図」、「中図」、「小図」の３種類があること、忠敬の実測を基に、１８２１年に幕府天文方の手で「大日本沿海輿地全図」が完成したことなどが報告された。

（２）　赤松小三郎と銃

・　報告者：関良基氏

・　概要：上田市立博物館に寄託した小三郎の遺品３点（「八分儀」、「背負弾薬箱」、「ミニエー銃」）についての概要の説明が行われた。

・　長崎以降の小三郎の翻訳書には、「新銃射放論」（ミニエー銃の性能、仕組みなど新銃の技術論）、「矢ごろのかね」（命中率向上のための射撃マニュアル）、「選馬説」（軍馬の育成）、「英国歩兵練法」（新銃に対応した散開戦の戦闘マニュアル）があるとして、各々の概要が説明された。

・　特に、「新銃射放論」については、ミニエー銃の性能を広く紹介することが翻訳動機であったこと、速やかにミニエー銃の製法を習得して国産化し、順次配備していくべきと訴えていること、付録として日本初の可能性のあるミニエー銃の分解図が付されていることなどが説明された。

・　赤松の軍隊号令の起源が八木剛介著の「田原記聞」にないか調べる必要があることが指摘された。

第３５回赤松小三郎研究会

日時：２０１９年１２月１４日（土）午後２時～午後４時半

（１）　赤報隊と信濃の関係について

・　報告者：沓掛忠氏

・　概要：薩摩藩が時局を利用すべく結成した「赤報隊」（相樂総三総裁）には、小三郎とも厚い交誼のあった佐久の神官水野丹波も隊員として加わっていたこと、その後、「赤報隊」は、「用済みの邪魔な存在」として、官軍から「偽官軍」のレッテルをはられ、東山道軍からの捕縛命令を受けて小諸藩などの信州諸藩が攻撃を行ったこと、赤報隊の主な指導者たちは、下諏訪で捕縛され、裁判にすらかけられず斬殺・処刑されたこと、明治３年（１８７０年）に相樂塚（魁塚）が建立され、名誉が回復された（昭和３年には正５位が贈られた。）ことなどが報告された。

（２）　「絶賛された“逝きし世＝徳川近代“と「小栗忠順」を思う～崩壊しつつある日本を憂える～

・　報告者：中野忠洋氏

・　概要：多くの諸外国の公式文書等の訳本を読み、改めて、徳川時代の江戸が、戦争を嫌う（平和を望む）日本の文化・文明の原点であったこと、諸外国のうち、“逝きし世”の素晴らしさを支えてくれたのは、オランダであったことを忘れてはならないこと、などが述べられた。

○　赤松小三郎遺品の上田市立博物館への寄託について

・　報告者；荻原貴氏

・　概要：当研究会有志で、小三郎の遺品の「八分儀」、「背負い式弾薬箱」、「ミニエー銃」の３点を、大阪の収集家から買い取り、上田市に寄託し、予算措置を待っている状況であることが報告された。

第７回赤松小三郎講演会

日時：２０１９年９月２８日（土）午後２時～午後４時半

演題：「赤松小三郎と坂本龍馬・中浜万次郎」

講師：岩下哲典東洋大学教授

ポイント：

・　歴史とはバランス感覚を磨くものであり、偏狭にならないための基礎教養である。

・　１８５３年のペリー来航の１年前に、オランダが、長崎奉行を通じてその情報を幕府側に伝えており、幕府はそれを基に、事前に議論し、対応を検討していた。

・　外様大名である黒田藩主黒田斉溥（なりひろ）の対外建白書は、ペリー来航前では唯一の建白書であり、ペリー来航後の阿部正弘の近代化施策の基となり、後押しとなった。

・　慶応３年（１８６７年）５月に赤松小三郎が国家構想を出したとき、多くの人が赤松はすごい人だと理解した。

・　この中では、特に、議政局の選挙で門閥貴賤に関係なく公正に選ぶとされていること、議政局を重視している（議会が２度決議すれば法律になる。）こと、小さい政府を目指していることなどが注目される

・　赤松の議会、政治制度の構想は、国民国家の構想であり、トータルで国家を具体的に構想しており、赤松ならではのもの、突出しており、出色。

・　赤松と坂本龍馬の直接の接点は見いだせないが、龍馬は、赤松の構想を参考として実現しようとして、奔走した可能性もある。

・　中浜万次郎は、わが国の近代化を支えた多くの人々に大きな影響を与えたが、赤松の建白書の議会・政治制度の構想にも、一定程度影響を与えた可能性がある。

・　赤松が生きていれば、明治の強権的な政治とは違ったものとなったかもし

れない。

第３４回赤松小三郎研究会

日時：２０１９年6月８日（土）午２時～４時半

（1）　上田藩本郷御弓町屋敷について

・　報告者：栗山正雄氏

・　概要：上田藩が安政５年（１８５８年）に拝領し、上屋敷、中屋敷として利用した「本郷御弓町屋敷」について、その位置、広さや変遷などについて、報告が行われた。

（2）　長崎海軍伝習所及び神戸海軍操練所・勝海舟の私塾及び築地の軍艦操練所とその後の日本海軍の発展について

・　報告者：沓掛忠氏

・　概要：ペリー来航に伴う国際状況等への対応として、幕府は、海軍力強化のため、海軍教育機関として、まず長崎の海軍伝習所をつくり、続いて築地に海軍操練所、平行して神戸に軍操練所をつくったが、それぞれの教育機関が建設されるに至った経緯や役割等について詳細な報告が行われるとともに、明治維新後の海軍創建の原点が徳川幕府の海軍教育にあったことなどが述べられた。

（3）　天武天皇の信濃遷都計画

・　報告者　沓掛忠氏

・　概要：「信濃」が歴史の舞台に登場しそうになったことが３回あるとして、陸軍士官学校の佐久への移転（昭和２０年６月～同年８月３１日）、松代への政府・軍の中枢機関の移転計画（終戦により実現せず。）、天武天皇の信濃新都建設構想（天武天皇の死により実現せず。）の３つを挙げ、それぞれについて詳細な説明が行われた。

第３３回赤松小三郎研究会

日時：２０１９年4月１３日（土）午後２時～午後５時

（1）　洋学史学会の発表～赤松小三郎について

・　報告者：石川浩氏

・　概要：　平成３１年３月３１日、洋学史学会で東京工業大学大学院学生の橋本真吾氏による講演「『議会制』議論と軍事―上田藩士・赤松小三郎の洋学―」が行われたことが報告され、報告者から「若い大学院生が、小三郎に興味を持ち、熱心に研究し、彼への思いを熱く語ってくれた事に、感動しました。」との感想が述べられた。

（2）　上田における岩下哲典教授講演会報告

・　報告者：小山平六氏

・　概要：平成３１年２月２３日に、２０１８年度第３９回上田女子短期女子大学総合文化学科公開講座として開催された岩下哲典教授の講演「幕末の先覚者・上田藩士赤松小三郎と坂本龍馬」についての報告が行われ、“複眼の視座に立ち、１つの思想や宗教にとらわれないことが重要である”、“龍馬が暗殺された理由は赤松の構想が現実味を帯びてきたため”などの講師の言葉が、報告された。

（３）　「赤松小三郎と勝海舟」

・　報告者：滝澤進氏

・　概要：赤松小三郎は、安政２年（１８５５年）に勝の内侍として長崎海軍伝習所に入所し、その後の成長・飛躍へとつながる貴重な経験を積むことができたが、報告では、まず、勝海舟の思想と行動を幕末政治の動きの中でたどるとともに、小三郎と勝との接点を確認し、それが小三郎の人生にいかなる意味を持ったかを考察した上で、小三郎と勝を「政治思想」と「政治への影響」の両面から比較した。

講演会のご案内

赤松小三郎と勝海舟

2021
12月12日
（日）

赤松小三郎　～幕末に誰よりも早く日本近代化のグランドデザインを描いた男～

赤松小三郎
上田市立博物館蔵

幕末、信州上田藩士赤松小三郎は、京都で開いた洋学塾などで多くの英才を育てるとともに、わが国の近代化に向けてのグランドデザインを描きその実現に力を尽くしました。

残念ながら、赤松は、1867年（慶応３年）37歳で志半ばにして暗殺されましたが、その先進的な政治思想と優れた洋学の教えは日本の近代化に大きく貢献しました。

当研究会では、今回、歴史家で幕末史に詳しく、数多くの本を著されている安藤優一郎氏をお迎えし、「赤松小三郎と勝海舟」についてお話をお伺いします。

勝海舟
提供　大田区立勝海舟記念館

日　時：2021年12月12日（日）講演14:00～16:30（受付開始13:30）
会　場：日比谷図書文化館　地下１階コンベンションホール（裏面案内図ご参照）
参加費　：1,000円（当日会場受付にて申し受けます）
対　象　：幕末の歴史にご興味ある方であれば、どなたでも大歓迎です
定　員　：１００名（先着順　お早めにお申し込みください）

講　師　安藤優一郎　氏　略歴

1965年（昭和40年）千葉県生まれ。歴史家。早稲田大学文学研究科博士後期課程満期退学。文学博士（早稲田大学）。江戸をテーマとする執筆・講演活動を展開。

ＪＲ東日本大人の休日倶楽部趣味の会などの生涯学習講座の講師を務める。『お殿様の人事異動』（日経プレミアシリーズ）、『明治維新　隠された真実』『河井継之助』（日本経済新聞出版社）など著書多数。

講師からひとこと

赤松小三郎の師は、坂本龍馬の師でもあった幕臣勝海舟でした。海舟は薩摩藩をはじめ諸藩に幅広い人脈を持っていましたが、赤松も同じです。

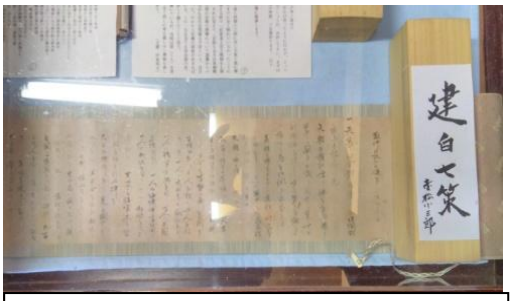
海舟の場合は、その人脈が先進的な思想形成の基盤となりましたが、そうした事情は赤松にもあてはまります。今回の講演では師弟にあたる海舟と赤松の生きざまを重ね合わせることで、どのような人脈のもと赤松の先進的な思想が形成されていったかを明らかにします。

お申込は

赤松小三郎研究会事務局（Eメールで事前のお申し込みをお願いいたします）
Eメール：kannazuki-6318@kxb.biglobe.ne.jp
（お名前、ご住所、本講演会をお知りになったきっかけなどご記入ください）
Eメールをご利用できない場合：電話：070-2685－2384（事務局　小山）
（提供いただく個人情報は講演会の案内などの目的で適正に取扱うとともに、目的外利用はいたしません）

主催　上田高等学校関東同窓会赤松小三郎研究会

赤松小三郎【天保2年（1831年）～慶応3年（1867年）】



建白書複製（赤松小三郎記念館）
原資料は鹿児島県歴史史料センター黎明館蔵

幕末の信州上田藩士。江戸に出て内田弥太郎、下曽根金三郎に師事し、数学、天文、測量、暦学、蘭学、砲術を学ぶ。その後勝海舟に入門し、その供侍として長崎海軍伝習所で航海術などを学ぶ。さらに横浜で英国士官アプリンから英語、英国兵法などを習う。

幕末の京都で開いた私塾や薩摩藩邸、会津藩邸で洋式兵学を教えた。諸藩より学ぶ門下生の数、８００余名。その中には東郷平八郎元帥、上村彦之丞大将など日清、日露戦争で活躍した諸将が含まれる。薩摩藩島津久光侯の委嘱により「重訂　英国歩兵練法」を翻訳した。

慶応３年５月、前政事総裁職（前福井藩主）の松平春嶽侯、島津久光侯及び幕府に建言した「建白七策」は、今後の政体構想と国家のグランドデザインを描いたもので、政治史のなかで輝いている。

天幕一和、諸藩一和のもと上下二局の議政局により内憂外患のこの時期を乗り切る方策を模索し、西郷隆盛や徳川慶喜への働きかけを行うなど、最後まで東奔西走したが、明治維新直前の慶応３年９月、京都において弟子の薩摩藩士桐野利秋らにより暗殺された。享年３７。

上田市（上田城跡公園内）に赤松小三郎記念館がある。

■会場のご案内

〒100-0012
東京都千代田区日比谷公園 1-4
日比谷図書文化館（地下１階）
日比谷コンベンションホール
（大ホール）（旧　日比谷図書館）

都営地下鉄●三田線「内幸町駅」A７出口／徒歩3分
東京メトロ
●丸の内線●日比谷線「霞ケ関駅」B２出口／徒歩3分
●千代田線「霞ケ関駅」C４出口／徒歩3分
ＪＲ「新橋駅」日比谷口（ＳＬ広場）徒歩10分
※当施設に駐車場・駐輪場はございません。公共交通機関をご利用下さい。